

2024年診療実績

【血液・腫瘍内科】

2024年1月1日から2024年12月31日までの外来と入院に関してのまとめです。

代表的な疾患の初発患者さんの数と入院数を表にしています。延べ入院数は、302件です

	初発（人）	入院数（延べ）	入院数（人）
急性骨髄性白血病	10	64	14
その他の急性白血病	1	6	1
骨髄異形成症候群	4	5	5
B細胞リンパ腫	14	111	43
T細胞リンパ腫	7	20	7
多発性骨髄腫と関連疾患	5	16	9
慢性白血病、骨髄増殖性腫瘍	4	4	4
ホジキンリンパ腫	1	1	1
固形がん	8	45	24

年間の外来化学療法件数も増加しており、786件/年となりました。その中で360件が血液がんに対する治療であり、半数がそれ以外となります。

1 血液悪性腫瘍

新病院では、無菌室を4室有している為に、急性骨髄性白血病を代表とする強力な化学療法が必要な疾患に対して標準的な治療が出来る様になり、治療を行っています。急性骨髄性白血病に対する新規治療薬が発売となり、高齢者の治療法が確立しました。その為、従来は治療適応が無かった高齢者の急性骨髄性白血病に対しても加療が出来、入院件数が急増しています。

血液悪性腫瘍を治療する病院では、B細胞リンパ腫の加療が最も多くなりますが、当院でもB細胞リンパ腫が最多となっています。悪性リンパ腫の治療は、外来で継続可能な為に、多くの患者さんが入院にて治療を導入し、外来で継続治療を行っています。それ以外にも様々な血液悪性腫瘍の治療を行っており、がん薬物療法以外にも放射線治療なども併用しています。

治療に対する考え方としては、日本血液学会や海外の学会等のガイドラインに沿って、標準的に行っています。出来るだけ、標準治療を行う事を心がけていますが、高齢者の悪性腫瘍が増えてきた事もあり、標準的な加療が出来ない場合もあります。その際には、高齢者でも出来る治療の提案や緩和医療の導入なども行っています。

2 悪性腫瘍以外の血液疾患

悪性腫瘍以外の血液疾患に対しても診断と加療を行っています。良性疾患の場合、ほと

んどの場合が、外来のみで対応することも多いのですが、必要に応じて、入院対応も行っております。多いのは、貧血に対する対応ですが、溶血性貧血などの自己免疫疾患の対応も行っています。また、感染症に対応も複数件数の対応をしています。

当院は、多くの診療科を有している為に、複数の診療科での連携依頼での紹介も受けています。

3 血液以外の悪性腫瘍

腫瘍内科としての診療も増加しています。年間で 426 件の外来化学療法を行っており、ほとんどが消化器がんに対する治療ですが、産婦人科などとも共同での治療も行っております。また、原発不明がんの対応も行っています。免疫チェックポイント阻害薬を治療薬として使用する機会が増えており、有害事象が複雑となり、他科との診療連携が重要になっています。

当科の診療は、様々な診療科と連携で加療する事が多く、当院では多くの診療科があることで、安全に加療する事が出来ています。今後も多くの診療科との連携にて加療を行っていきます。